

読書通信



No. 125

① ソ連崩壊、アラブの春などを予見してきた歴史家であり人類学者である著者が今度はドイツの隆盛を論じた。エマニュエル・トッド『ドイツ帝国』が世界を破滅させる』（文春新書、864円）は書名からしてすごいが（原題は「欧州大陸を牛耳るドイツ」、オランダ、ベルギー、オーストリア、チェコはドイツ圏、スウェーデン、ポーランド、バルト三国はロシア嫌いのドイツの衛星国、フィンランド、イタリア、スペイン、ポルトガルは事実上の被支配、ウクライナは併合途上、フランスはなんと自主的隷属国

だと著者は言う。欧州で独自性を保っているのはイギリスとノルウェーくらいのものである。だから、まさに「ドイツ恐るべし」である。

欧州の人口学、パワーポリティクスと地政学が縦横に語られて（インタビュに答える形式である）説得力十分と感じた。ロシアとアメリカ、ユーラシアももちろん検討対象で、日本への重要な示唆を持った内容だと著者は力説する。バックスアメリカナの時代は終わり、米中独ロが世界を分割する時代が到来するのか（ロシア軽視の風潮は厳しく論駁される）。新書とはいえ、問題提起はまことに重いものがある。

② 桂小五郎（木戸孝允）、高杉晋作、久坂玄瑞、井上聞多（馨）、吉田松陰。日本近代の基礎を築いたと信じられている自称「勤皇志士」に対す

る原田伊織『明治維新という過ち』（毎日ワンスズ、1620円）の評はまことに厳しくて、アジア侵略へ日本を誤らせた長州のテロリストにすぎない、と散々である。特に彼らをテロリストに育て上げた吉田松陰は徹底的に糾弾される。

というわけで、小説や映像で頭に刷り込まれてきた人物像や事件の数々がひっくり返って見えてきて、西郷隆盛、徳川斉昭、阿部正弘、坂本龍馬らの実像もこれほどかとびっくりする。

水戸学の狂信性、会津戦争での長州のおぞましさも再確認できる。幕末以降の歴史とは薩長の書いた歴史であることは改めて頭に叩き込む必要がある。その意味でも半藤一利『幕末史』（新潮文庫、766円）との併読をお勧めする。

③ 「地方創生」という言葉が巷に氾濫している

が、マクロの話よりも、町をどう具体的に活性化するか、小さな小さな創業をどう進めていくか、という観点からの取り組みが大事だと感じる。木下斉『稼ぐまちが地方を変える』（NHK出版新書、799円）はその点、大いに参考になった。「小さく始めよ、全員の合意はダメ、利益率にとことんこだわれ」など体験に裏付けられた多くの実践的ヒントにあふれている。

④ イスラム過激派のテロは収まる気配がないが（収まるはずもないのだが）、小倉孝保『三重スパイ』（講談社、1944円）はロンドンのモスクに潜入し過激派の動きをスパイしたアルジェリア出身の男、ハセインの半生を詳細に追ったノンフィクションの力作。ただし「三重」スパイというのは羊頭狗肉の類である。（純）